

### モデルケース:川崎市アートセンター

映画を包含した、地域の「メディア芸術センター」といえる施設は、すでに各地に存在している。1988年に開館した川崎市市民ミュージアムは、写真、グラフィック(ポスター)、漫画、映画といった“複製芸術”、“大衆芸術”を対象とする美術館として注目を集めた。このほかにも、東京都写真美術館、せんだいメディアテーク、山口情報芸術センターなどが、従来の美術館とは異なる機能を備えた新しい文化施設として開館している。いずれも映像、メディアアートなど新しい技術によって生み出される芸術作品を展示や収集の中心に据え(コレクションをもたないというケースもある)、図書館やメディア(情報)センターといった機能・施設を併設している点でも、これまでの美術館や博物館とは異なる特徴を備えている。これらは、地域のメディア芸術センターのモデルとして挙げられるものではあるが、いずれもその都市の中核となる文化施設として建設されたものであり、準備にかかった時間と費用、建設費、開館後の運営にかかる経費も膨大であり、容易に実現できるものではないことも明らかである。

そこで、ここでは地域のメディア芸術センターのモデルケースとして、2007年に開館した「川崎市アートセンター」を紹介することにした。川崎市アートセンターは、舞台芸術のための「アルテリオ小劇場」と公設のミニシアターともいべき「アルテリオ映像館」というふたつのホールを中心に、小規模な展示スペースやワークショップができるコラボレーションスペース、録音室や編集室を併せ持つ比較的コンパクトな文化施設である。

川崎市北部の小田急線「新百合ヶ丘駅」のほど近くに位置し、開館以来、多くの来館者を集めている。近年開館した文化施設としては小規模ながら堅実な成功例に挙げられるだろう。メディア芸術を対象としているわけではないが、その規模や機能、運営方法などは、今後、地域のメディア芸術センターを考える上で参考にできることは少なくない。

#### 川崎市アートセンター [写真1]

神奈川県川崎市麻生区万福寺6-7-1

2007年10月開館

構造:鉄筋コンクリート造、3階建

敷地面積:2,138㎡

延べ床面積:1,912.19㎡

#### ・運営形体

川崎市による指定管理者制度

指定管理者(2010年3月現在):川崎市文化財団グループ

(財団法人川崎市文化財団とNPO法人アートネットワーク・ジャパンによる共同事業体)

舞台芸術、カフェ事業はアートネットワーク・ジャパンが運営

施設管理、映像事業は川崎市文化財団が運営



## ・施設概要

芸術を「創り、育て、楽しむ」センターとして、小規模ながら広さ十分な舞台と観やすさを追求した195席の劇場「アルテリオ小劇場」、ユニバーサルで多様なリテラシー空間として画期的な機能を備えた113席の映像ホール「アルテリオ映像館」の二つのホールを中心にワークショップやトークイベント等を行えるコラボレーションスペースや映像編集室、録音室を備えた文化芸術施設。



### 1 | アルテリオ小劇場 [写真2]

小規模ながら広さ十分な舞台と観やすさを追求した195席の劇場では、公演や演出によって舞台や客席を最もふさわしい形に設定できる。客席と舞台の境界線のないオープン形式の空間を生かしたダンスパフォーマンスや、演劇の公演に加え、年間を通してアーティストのクリエイションをサポートするクリエイション・サポート事業を行っている。

席数——195席(基本形式・車椅子2席を含む、最大214席)

舞台——間口：11.4m

奥行き：7.4m(基本形式・舞台前面から Horizont まで)

※客席数214席の場合6.370m(固定舞台部分)

※客席数138席の場合11.670m(固定舞台+可動舞台)

高さ：9.05m(舞台面からスノコまで)

吊物：客席バトン3本/美術バトン19本(長さ10.2m/許容荷重300kgまで、速度10cm/s/一定速度)



### 2 | アルテリオ映像館 [写真3]

《アルテリオ・シネマ》として、新作から名画まで、世界の多様な映画を上映。また、監督や出演者、映画評論家など多彩なゲストによるトークも開催している。目や耳の不自由な方のための副音声ガイド・字幕付き上映も実施。上映事業だけでなく、副音声ガイド制作や映画・アニメ作りのワークショップ、上映支援や撮影支援など幅広い事業に取り組んでいる。

席数と座席——113席(車イススペース2席分含む)

椅子=コトブキ社製/TS-532544L(全席カップホルダー付)/座幅：55cm/

前後間隔：105cm

映写機——35mm映写機：NDK FX-5000×2台(映写スピード：15コマから30コマに対応/音声フォーマット：モノラル、ドルビーAタイプ、SR、SR-Dに対応)

HD対応4Kビデオプロジェクター：SONY SRX-R105×1台(JPEG2000、HDCAM、BETACAM/SP、Digital BETACAM、BETACAM SX、HDV、DV CAM、DV、ブルーレイ、DVDに対応)

スクリーン——スチュワート社スノーマット100相当

スクリーンサイズ——スタンダード(1:1.33)：2800mm×3730mm

ヨーロッパン・ビスタ(1:1.66)：2800mm×4650mm

アメリカン・ビスタ(1:1.85)：2800mm×5180mm

シネマスコープ(1:2.35)：2800mm×6580mm

ハイビジョン(1:1.77)：2800mm×4960mm

音響設備——スピーカーマネジメントシステム：Meyersound Galileo616

メインスピーカー：Meyersound CQ-1×3台

サブウーハー：Meyersound 700-HP×1台

サラウンドスピーカー：Meyersound UPM-1P×12台



### 3 | コラボレーションスペース [写真4-6] ——128.5㎡

アートセンターに集うすべての人のためのオープンスペース。

アルテリオ映像館、アルテリオ小劇場で上映・上演した作品の監督や演出家などを迎えてのトークショーや、ワークショップ、様々な展示、ミニ・コンサートなどの関連イベントも実施できる創造活動、またコミュニティの場として活用。一角にはカフェをオープンしている。

### 4 | 映像編集室 [写真7] ——11.3㎡

高品位なノンリニア編集ができ、一般使用されているビデオカメラで撮影したものは、どのようなフォーマットにも対応。DV、DVCAM、またHDCAMにも対応しているので放送関係の業務でも使用可能。一般の貸館利用や映画づくりのワークショップの編集、その他舞台公演の記録、映像館で上映する予告編集などに使用している。



### 5 | 録音室 [写真8] ——16.9㎡

録音室にある録音ブースは反響が少なく、ナレーション録音に最適。映像を見ながらの録音も可能で、映画・映像作品のアフレコもできる。アートセンターで制作するバリアフリー上映の洋画作品の副音声ガイド・吹替え収録はここで行っている。



### 6 | 研修室 ——18.3㎡

小規模の研修や打ち合わせ、控室や作業スペースとして使用。一般の貸館利用もできる。

### 7 | その他 [写真9]

エントランスホール ——149.6㎡

受付を中心に右に小劇場、左に映像館がある。エントランス中央には、東映株式会社、株式会社今村プロダクションより寄託を受けた映画監督・故今村昌平氏がカンヌ国際映画祭で受賞したパルム・ドールトロフィーを展示。小劇場横の通路、また映像館横の通路壁面を使用しての小規模な展示も可能。

事務室 ——39.5㎡



### ・建設経費

総額 ——11億3500万円(施設整備費として)

内訳 ——起債(市が発行した債券)6億8400万円、一般会計(市の税金)3億7500万円、神奈川県からの補助金7600万円

## ・スタッフ

[総務関係]

館長(嘱託職員):アートセンター全体の館長  
副館長(嘱託職員):アートセンター全体の副館長  
庶務1人(嘱託職員):アートセンター全体の庶務・会計等  
庶務アルバイト1人:庶務補佐  
受付スタッフ(館全体の受付スタッフ・アルバイト)4人  
※清掃は外部委託

[アルテリオ小劇場関係]——計8人

小劇場ディレクター1人/技術監督1人/広報1人/企画・制作4人/映像1人  
※委託職員の技術監督の他はアートネットワーク・ジャパン職員

[アルテリオ映像館関係]——計6人

映写技師(嘱託職員)2人/スタッフ(嘱託職員)2人/スタッフ(委託職員)1人/スタッフ(アルバイト)1人

映写技師は映写を中心にその他庶務を行い、その他のスタッフは、日常の映画上映、ワークショップ等の文化創造事業の企画や制作進行、それに伴う広報・宣伝、イベント開催等、映画・映像事業に関わるすべてを行っている。スタッフは学芸員のような専門課程を経ているわけではない。映画・映像事業では、上映作品や企画への助言を多岐に受けるために、企画・作品選定委員会を設けている。専門家の助言を受けながら映像館担当スタッフが主体的に事業を行っている。

## ・運営費

**2009年度収入(決算ベース)——2億3,216万円**

内訳——指定管理料:1億5,682万円  
補助金収入:1,870万円  
事業収入(雑収入含む):5,664万円

**2009年度支出——2億3,971万円**

内訳——事業費:1億2,474万円  
一般管理費:1億1,497万円  
※収支の差は前年度の繰越金を充当

**2009年度映像事業関係事業収支(決算ベース)**

事業収入:3,390万円  
入場料収入:3,059万円  
その他雑収入(物販等):250万円  
事業支出:3,825万円  
映画料:1,590万円  
広告宣伝費(新聞広告・印刷製本費):547万円  
外注費(委託費):1,076万円  
外注費内容——スタッフ委託費(1人)、諸謝金、デザイン等委託費

※収支の差は映像事業費指定管理料を充当。

※一般管理費(財団雇用人件費、施設維持費等に関わる経費)は川崎市からの指定管理料より充当。

## ・2009年度 映像事業概要

### 上映事業(アルテリオ・シネマ)

#### 1 | 公設のミニシアターとしての事業(シネマ・シンジケート加盟館)

毎週月曜休映(施設点検日あり)、1日4作品-5作品を上映

2009年度上映作品本数——133作品

内訳:洋画46作品(内アニメーション1作品)、邦画87作品(内アニメーション4作品)

※邦画の特集上映が多いため、洋画作品を上回っている。

- ・ゲストトーク、関連したコンサートや展示なども行う。[写真10]
- ・副音声ガイドや日本語字幕(バリアフリー上映)の作成と上映。(邦画年2本洋画年2本程度制作。既存のガイドを使って上映する場合もある)
- ・保育付き上映(上映中に、専門の保育スタッフに子どもを預け、保護者が映画を楽しめる)
- ・休映日を使用した地域の小・中学校のPTAや地域団体による団体鑑賞の受け入れ。
- ・地域イベントや団体や大学などの教育機関と連携した上映や、上映者や制作者による持込み企画(自主上映企画)の上映

2009年度来場者数:35,903人(KAWASAKIしんゆり映画祭での入場者を含む)

#### 2 | KAWASAKIしんゆり映画祭

1995年より川崎市の「芸術のまち構想」の一環として新百合ヶ丘で毎年秋に行われる市民映画祭。上映だけでなくシンポジウムや、1997年からは副音声ガイドと日本語字幕を制作してのバリアフリー上映、2000年からは学校の校庭を使用しての野外上映や、中学生がひとりで映画をつくるジュニア映画制作ワークショップをスタートさせる。2007年当館開館より、オープニングはワーナー・マイカル・シネマズ新百合ヶ丘にて、その後の日程は共催事業としてアートセンターをメイン会場として開催している。開催当初は、日本映画学校の関係者を中心に行い、その後はボランティアスタッフを公募し、市民プロデューサー制度を導入するなど、一般市民が企画運営を行う市民映画祭としての地位を次第に確立していった。現在は、NPO法人KAWASAKIアーツが運営(2006年設立)。

2009年度来場者数:2,182人(初日含む)

#### 3 | アルテリッカしんゆり(2009年-)

ゴールデンウィークに新百合ヶ丘周辺に多数存在するホールで開催する音楽、映画、演劇、伝統文化など様々な分野の催しものをそろえた芸術祭。アルテリオ映像館では、新百合ヶ丘にゆかりのある今村昌平監督の特集上映を中心に開催。

2009年度来場者数:2,023人

#### 4 | シネマテーク・プロジェクト

コミュニティシネマセンターを中心に、国内の公立映像専門施設が協同で実施している同プロジェクトに参加し、これまで上映される機会のなかった映画史上重要な作品を上映・巡回している。

2008年度「フランス映画の秘宝」、2009年度「山中貞雄監督特集」、2010年度「ポルトガル映画祭2010——マノエル・ド・オリヴェイラとポルトガル映画の巨匠たち」を開催。

#### 5 | 優秀映画鑑賞推進事業

文化庁と東京国立近代美術館フィルムセンターが行っている日本映画の名作巡回事業。





広く国民に優れた映画鑑賞の機会を提供するため、日本各地の公立文化施設と連携・協力して、所蔵映画フィルムを巡回している。アルテリオ映像館でも毎年開催。

2009年度上映〈女優たちの昭和名作シネマ〉来場者数：866人

### その他の事業

#### 1 | シネマわくわくワークショップ

(小学生対象。毎年春・夏休みに開催。開館以来続けている事業)

##### •だれでもできる映画ワークショップ [写真11-12]

映画監督が講師になり、3日-4日間で映画づくりを行う。2009年夏休みは萩生田宏治監督(『神童』『コモのコモ』他)、2010年春休みは伊勢真一監督(『奈緒ちゃん』『風のかたち』他)が講師を担当。最終日に映像館を使用して完成作品上映会を行う。

2009年度参加者数：49人/申込者数：100人

※3日-4日間開催。定員20名(応募状況により定員を増やす) ※春・夏開催を合わせた人数



##### •アニメ1日教室 [写真13-14]

工作をしながら絵が動くしゅみを学ぶ短時間型のワークショップ。講師は昼間行雄さん(映像作家。(財)児童育成協会職員。現在は日本大学芸術学部映画学科、東京工芸大学アニメーション学科他で後進の指導に携わる)が担当している。

2009年度参加者数：229人/申込者数：576人

※1日2回、2日間開催。定員30名(応募状況により定員を増やす) ※春・夏開催を合わせた人数

#### 2 | 3分間ビデオ制作入門講座

「押入れからビデオカメラを救おう!」を合言葉に、初心者向け(対象：高校生以上)の映像制作ワークショップ。3分間の映像作品をつくり、完成作品の上映会を映像館で行う。

参加者数：14人/申込者数：17人

※全10回開催。定員12人(応募状況により定員を増やす)

